



Tonoo Market district "Tonneru Yokochi (tunnel shopping arcade)" tells the story of the changing face of Sasebo

佐世保の変遷を今に伝える戸尾市場街「とんねる横丁」 長崎県佐世保市

Special Features / Conversion of civil engineering facilities



株式会社建設技術研究所／東京本社／地球環境センター
細谷州次郎 (会誌編集専門委員)
HOSOYA Shujiro

特集
土木施設の転用

防空壕を利用した店舗

「市場」が「街」を形成する長崎県佐世保市の戸尾市場街には「とんねる横丁」と呼ばれている場所がある。JR佐世保駅にほど近い60m程度の通りに沿って、約15店舗が軒を連ねる。店舗は戦時中の防空壕だったトンネルを利用してあり、名前の由来が偲ばれる。

とんねる横丁は高台の下部にあり、上部は明治期より学校施設として利用されてきた。戦後は戸尾小学校となったが、2001(平成13)年3月に他校との合併で閉校し、2006(平成18)年以降は佐世保空襲資料室等として利用されている。

一見すると普通の市場であり、とても防空壕を利用しているようには見えない。防空壕は、専門家ではない市民が掘ったと思われる横堀となっている。

なぜ、そのような防空壕を店舗利用するに至ったのであろうか。

急速に発展した明治の佐世保

1886(明治19)年、富国強兵を図る日本は、東アジアへの進出の拠点地となる軍港と鎮守府(旧日本海軍の拠点となる高等司令部)を佐世保に設置することを決める。明治維新までは半農半漁の村であった佐世保で、軍港と市街地の造成が急ピッチで進んだ。現在の碁盤のような市街地はこのとき計画されたものである。その範囲は佐世保川に沿って、南はとんねる横丁が位置する戸尾町付近から、日本一長い直線でつながったアーケード(約960m)で結ばれた三ヶ町商店街・四ヶ町商店街、佐世保市役所を抜け、北は松浦鉄道の北佐世保駅近くの俵町までとなっている。

軍港建設を契機に、技術者や労働者をはじめとする様々な人々が佐世保に流入し、人口は1886(明治19)年の4,111人から急増する。1902(明治35)年4月の佐世保市制施行時は45,766人であった人口が、年末には50,968人を記録している。鎮守府開庁の決定以降、市



写真1 戸尾市場街入り口

が誕生するまでのおよそ15年間で、人口は実に10倍以上となり、急速に都市化した。ただし市民の人口構成は男性が女性の1.5倍以上となり、軍人も入れると極端に男性が多い街であった。

人口が増えると、自ずと食料や日用品の需要が高まり、街も賑わいを見せていった。1892(明治25)年の佐世保の地図では、現在の高砂町付近に勧工場の存在を確認できる。勧工場とは小売商店の集合施設のことであり、今で言うショッピングモールである。間もなく、500m程度しか離れていない現在の浜田町に2つ目の勧工場ができ、こうした勧工場が市場の前身となる。

勧工場から市場街へ

大正期の日本は第一次世界大戦に参戦し、シベリア出兵をしている。大正デモクラシーの最中であり、九州では八幡製鉄所を中心にストライキが相次ぐ状況であった。そうした社会状況の中、米騒動が起こる。

佐世保においても、海軍工廠の従業員をはじめとする群衆のデモが現在の三ヶ町商店街付近で発生。市当局は迅速に対応し、国の指針に基づいて1918(大正7)年より公設市場を順次設置する。同年の第一号市勢要覧には6市場が掲載されている。この流れで1935(昭和10)年、とんねる横丁近くに京町公設市場が開設されている。

公設市場は屋内に数本の通路を設け、その両側に店棚を配置した一棟の大きな上屋を当局側で整備し、安く適正な商品を販売することを条件に、希望者に格安で敷地を貸し出すものである。商品が公正な価格で売られていることから市民には「マルコウ」と呼ばれ、適正な取引の確立に大きく寄与したようだ。

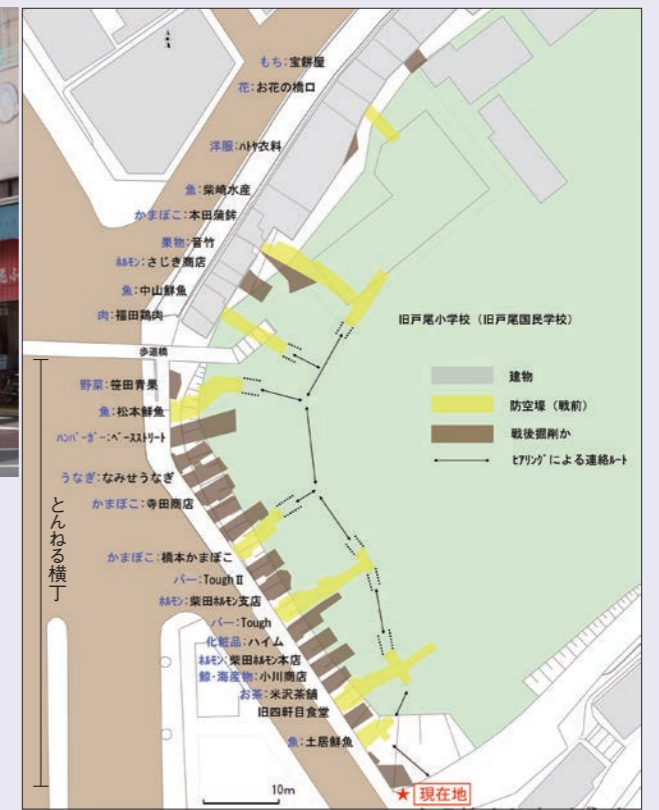


図1 戸尾市場街のとんねる横丁 (佐世保市教育委員会の提供資料にとんねる横丁の範囲を加筆)

この時期、政府は市場機構の近代化を目指す市場開設都市の指定を行い、1927(昭和2)年、日本初となる中央卸売市場が京都に開設している。この開設にあたっては佐世保の市場が大いに参考とされた。それは「①卸売市場と小売市場が併設されていた」「②市場業務は民間企業や個人に委託され、現在の卸売～仲買～小売の流通システムの原形があった」「③市は市場の適正な管理運営を行う」等が当時の先進事例であったためである。佐世保市にも1938(昭和13)年に日本で8番目となる中央卸売市場が開設された。

このように佐世保は、近代日本の市場形成の面でも重要な役割を果たしてきたといえる。

第二次世界大戦と防空壕

第二次世界大戦が始まると佐世保市には軍事施設がさらに集積し、1944(昭和19)年、市史上最大となる人口287,541人を記録。現在のとんねる横丁付近には、様々な露店が100m以上並んでいたようである。

1943(昭和18)年初夏、行政は近郊の国民学校に防空壕掘削命令を発令。市が初めて空襲を受けた1944年(昭和19)年7月以降は、防空壕の掘削件数が大幅に増



写真2 無窮洞の主洞部分



写真3 防空壕を利用したトンネル状断面の旧四軒目食堂 (2017年頃)

える。掘削は陸海軍や市、町内会が主体となって行われたが、家族単位のものも多かったとされる。

こうした防空壕の中で最大のものは、市南部の旧宮村国民学校の子も達が掘った無窮洞である。国民学校高等科（現在の中学1・2年生）男子がツルハシで掘り進み、女子が整形を、下級生が土の運び出しを行った。全校生徒600人余りが入れる防空壕だが、教室と教壇からなる主洞（幅5m×奥行19m）、書類室や台所・食料庫に通じる副洞（幅3m×奥行15m）等が整備されている。全員が避難すると酸欠状態になったことから、その後は農具の唐箕で風を送ったようだ。地質が削りやすい凝灰岩であったことから子ども達でも掘り進められたのであろうが、その苦勞とその作業に追い込まれたであろう日常の圧迫感は想像を絶する。

後年、とんねる横丁に利用される防空壕は高さ3～4mの崖沿いに、幅3～4mで高さが2mの半円形の横穴7～8本が掘られ、それらが奥にある連絡トンネルで結ばれていた。誰が掘ったのか、誰が使用予定であったかは、确实なところは分かっていない。

1945（昭和20）年6月29日未明、市街地は大空襲を受ける。死者1,200人以上、罹災面積約178万km²、罹災戸数12,037戸（全戸数の35%）、罹災者約65,000人に及んだ。甚大な被害をもたらされた中で、とんねる横丁付近は奇跡的に戦火を免れた。

防空壕の店舗利用の始まり

戦後の混乱期、戸尾市場街には露天やバラック建ての店が増大。とんねる横丁付近では、特に芋や団子などの食べ物の露店が多かった。市中心部では物資が極度に不足しており、食材となる芋や穀物類は汽車やぼん

ぼん船で周辺の島から運ばれていた。このような状況の中、役目を終えた防空壕は、空襲で家を失った人の住居や店舗として利用されるようになった。

1946（昭和21）年、市は戦災復興都市計画を策定。戦後のまちづくりが動き始め、戸尾市場街の土地区画整理が決定する。とんねる横丁付近では道路整備の話が進められ、100m以上に及ぶ露店の営業が禁止された。しかし、行政側と生活のかかる露店側が対立し、事業はなかなか上手く運ばなかった。行政指導が厳しくなる中、防空壕を店舗スペースに活用する発想が生まれる。それには、市から道路の占用許可を得、土地の使用料を払うことで利用できるものとした。

店の造りはある程度同じにすることになったが、「もっと奥行きが欲しい」と自己負担で掘る店舗もあった。場所によっては岩が堅いため石屋に掘削を頼まなければならなかった。例えば2016（平成28）年に閉店した旧四軒目食堂は高さ約1.8m、奥行き12～13mのトンネルになっており、奥にある座敷の小窓を開けると、防空壕当時の剥き出しの岩肌を見ることができる。当時、隣の店舗との仕切りはきちんとしたものがなく、障子で仕切っていた。入り口も閉店の際には、ベニヤ板を立てかけるなどで対応していた。

1948（昭和23）年、もともとあった5本の防空壕に加えて、崖にいくつかの窪みを掘って、後に「とんねる横丁」と呼ばれる18店舗が開業した。開業当時は全て食堂で、市民の台所として、戦後の佐世保の食を支え大繁盛した。

とんねる横丁のすぐ近くにも防空壕を利用した店舗がある。その一つの本田蒲鉾店によれば、「防空壕は気温と湿度が一年を通して安定していることから蒲鉾づく



写真4 開業当時のとんねる横丁



写真5 現在のとんねる横丁



写真6 「本田蒲鉾店」の作業場



写真7 左右に横穴をもつ「本田蒲鉾店」作業場奥

りには適している」という。

価値の創造と逞しさが融合するとんねる横丁

とんねる横丁が観光ガイドブックやTVで取り上げられるようになったのは、1990年代後半～2000年代前半のようである。戦後半世紀以上が経ったからこそ、防空壕利用のとんねる横丁はただの市場ではなくなり、戦前から戦中、戦後を語る証としての価値を見出され、注目を浴びるようになったのであろう。

とんねる横丁は、2016（平成28）年4月に認定された日本遺産「鎮守府横須賀・呉・佐世保・舞鶴～日本近代化の躍動を体感できるまち～」の構成資産の一部となっている。現地の紹介文には「焼け跡から復興を歩み始めた人々の逞しさを今に伝えている」と記されている。開業当時は全てが食堂だったとんねる横丁は、今では小売店が大半をしめている。防空壕であった過去を頭の隅におきつつ、戸尾市場街のとんねる横丁を体験しに出かけてみてはいかがだろうか。

<参考資料>

- 1) 『市場街の生活誌 一佐世保市戸尾市場街をフィールドとして一』中野美菜 2011年 関西学院大学社会学部 島村恭則ゼミ
- 2) 『ふるさと歴史めぐり（歴史教育副読本）』佐世保市教育委員会 2010年
- 3) 『日本遺産「鎮守府 横須賀・呉・佐世保・舞鶴」における佐世保市の構成文化財「海軍防備隊・警備隊砲台群『戸尾市場（とんねる横丁）』』紹介文 佐世保市教育委員会 2017年
- 4) 『文化財ハンフレット 無窮洞』佐世保市教育委員会 2013年
- 5) 『教育勅語・御真影と奉安殿』祖谷敏行 2018年3月 郷土研究 第45号 佐世保市郷土研究所
- 6) 『図説佐世保・平戸・松浦・北松の歴史（長崎県の歴史シリーズ）』久村貞男・萩原博文 監修 2010年 郷土出版社
- 7) 『地図でみる佐世保』平岡昭利 1997年 芸文堂
- 8) 『軍港都市佐世保の近代—ドイツ・キールとの比較を念頭に—』谷澤毅 2011年 長崎県立大学経済学部論文集 第44巻第4号

<取材協力・資料提供>

- 1) 佐世保市教育委員会文化財課
- 2) 無窮洞顕彰保存会
- 3) 有限会社本田蒲鉾店

<図・写真提供>

- 図1、写真3、4 佐世保市教育委員会文化財課
P30上、写真6 山口佳織
写真1、5 細谷次郎
写真2 徳武広太郎
写真7 塚本敏行